廣讃寺ジャーナル

第46号
(発行所)
真宗大谷派
松岡山 廣讃寺
中村区城屋敷町3-30
TEL(052)411-5301
FAX(052)411-5341
携帯 090-1568-4623

祝詞

本日茲に宗祖親鸞聖人七百五十回御遠忌法要が執り行なわれますことは 洵に慶びに堪えません

憶えば 親鸞聖人は永い求道生活の中で法然上人と値遇され師友の学びを通して三国七祖の教説に導かれて真実の教大無量寿経に出遇われました そして煩悩具足の身のままに救われる念仏易行の一門に通入されに感動を以って 顕浄土真実教行証文類 を著されました

宗祖聖人が出遇われに その大無量寿経には 如来無蓋の大悲を以って三界を矜哀したもう世に出興したもう所以は道教を光闡して群萌を拯い恵むに真実の利を以ってせんと欲してなり と説かれてあります まことに真実の教えに値い真実の救済に遇うことは無量億劫にも得難いことであります 本願他力の大道がもし聖人によって明らかにされることがなかったならば 私共の人生はどうなっていたでしょうか まさに宗祖の遺された言葉の一言一句が 無明長夜の灯炬として私達を導き続けてくださったのであります

爾来 身命を省みずして今現在説法しにもう親鸞聖人と対面し聞法求道に励み続けに歩みこそ真宗門徒の伝統であり 帰命無量寿如来 から始まる歓喜の歌 正信念仏偈を朝夕勤めてきた姿こそ真宗門徒の証しであります

ここに真宗本廟における宗祖御遠忌法要が真宗同朋会運動を表現する御仏事として厳修されました その千載一遇の法縁に遇い得た私達一人ひとりの責任と使命として新しい交わりを成就する仏法を基とする社会の実現に向け 今後とも帰依三宝の内実をいよいよ確かめてまいらなければなりません

願わくはこのたびの御遠忌法要が宗祖としてその親鸞聖人に遇う機縁となりまた聖人のみ教えをあらためてこの身に聞き聞き願生浄土に生きんとする御同朋の交わりの場となりますよう 切に念願しお祝いの言葉といたします

二〇一一年 十二月 四日

宗務総長 安原晃

表白

本日ここに廣讃寺住職継職するに当たりうやまって申し上げます

前住職八十九年の生涯は厳しき道ではございましたが独自の持ち前により立派に廣讃寺の法灯を守り抜いてくださいました

それを引き継いで浅学と非才の私ですが故人の願いを受け継いで廣讃寺の興隆のためご門徒力を合わせて歩んでまいります

仏祖照覧哀愍(あいびん)摂護したまへ

廣讃寺　釈　貴志

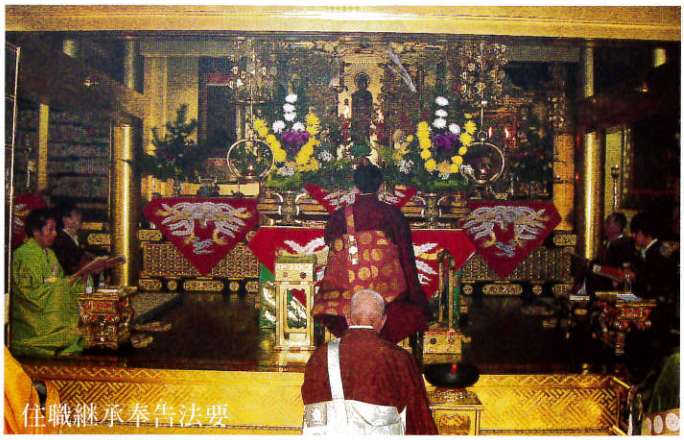
謹(うやま)って曰します

二〇一一年十二月四日

お華束準備

竹原了珠師の法話

学習会による演劇



住職継承奉告法要

完全燃焼して下さいと勧められた。

私は老僧生前で言った、観経の中の「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」が少しわかったような気になりました。

四日の御遠忌では勅使英照師が法話をされた。

今年の七月の法事に師の法話を聞いていたので親近感を覚える。法話の内容は私達の日常生活での信仰の在り方、生き方が中心で、問答形式でポンポンと打ち上げ花火の如く話されるので、つられて応答し、寝ている暇もなく、時間の経つのも忘れ、延長されてしまった。

信心が大切、念仏はそれを支えるのだ。その逆ではない。今朝の中日新聞にのっている親鸞の記事を読んだかの質問に、信心と念仏の内容だったことが答えられず、とっさに「今、いい所だわ」と答えてしまったので、びっくりされ、再読をうながされた。もっともなことであります。経と緯の話と同じこと。そしてお襁褓の詩と書院に出展された秋田芳廣さんの「絆」と「心」は奥でつながっているような気がした。信じ合い支え合う喜びを感じることの大切さではないか。もっと話したい、聞きたい余韻を残して終る。

満座御礼

けてしまうということ。自分の生かされている今になかなか気付かぬものですが…。

（三）仏の光（救い）は影をつくらない。

落語家立川談志の「落語は人間の業の肯定である」という言葉は

落語は人間の善悪の行為を語ることで悲喜こもごもの感動を与える仕事で、影の部分を忘れない所に笑いを誘う所があるからだ。さらに忠臣蔵が近付いたが四十七士は光っている

が約三百人の影の人がいたと。また、三帰依文の人身受け難しから、他人のことを僅かしか信じない自己中心の生き方を戒められた。

火葬場の職員の方の言葉「お照さん、知っとるけ。愚痴（ぐち）な人は焼けん」とな。竹原氏は落語の落ちをびしっと決められ思わず笑ってしまった。愚痴る人は焼けん（＝不完全燃焼）。こんな人生でなく

完全燃焼して下さいと勧められた。

私は老僧生前で言った、観経の中の「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」が少しわかったような気になりました。

四日の御遠忌では勅使英照師が法話をされた。

今年の七月の法事に師の法話を聞いていたので親近感を覚える。法話の内容は私達の日常生活での信仰の在り方、生き方が中心で、問答形式でポンポンと打ち上げ花火の如く話されるので、つられて応答し、寝ている暇もなく、時間の経つのも忘れ、延長されてしまった。

信心が大切、念仏はそれを支えるのだ。その逆ではない。今朝の中日新聞にのっている親鸞の記事を読んだ

の質問に、信心と念仏の内容だったことが答えられず、とっさに「今、いい所だわ」と答えてしまったので、びっくりされ、再読をうながされた。もっともなことであります。経と緯の話と同じこと。そしてお襁褓の詩と書院に出展された秋田芳廣さんの「絆」と「心」は奥でつながっているような気がした。信じ合い支え合う喜びを感じることの大切さではないか。もっと話したい、聞きたい余韻を残して終る。

満座御礼

二十組 本山団参に参加して

釈　綽智

十一月二十四日、二十組の行事として京都東本願寺の宗祖七五〇回御正当報恩講にお参りに行った。廣讃寺からは二十二名の参加。昨年と同日だったのに紅葉は少し早かった。バスは高速を使って二時間くらいで着いてしまったが七百回忌の時は高速も新幹線もなくて大変だったと思う。

予定通り十時からの日中法要に参加する。今回は指定席でなく、椅子席でもなかったので団体ごとにごちゃごちゃに座る。私達は中央やや左隅になったので御真影は柱が入り見にくかった。雅楽が入り登高座・伽陀・念仏が長々と続くのを柱のテレビを見ながら時々念仏を唱える。約一時間がたち全員で正信偈草四句目下と念仏に和讃三首、そして恩徳讃で終る。この様な座り方だと途中退席は人混をさけて右往左往せねばならないのでやっかいだ。私は左の出入口に近かったのでよかったが、何か物足りない気分。でも退席した時に廊下で新潟から来たという人と話が出来て同朋としてお参りしたことの嬉し

さを感じた。御影堂門近くの銀杏の黄葉を見ながら再び記念写真をとり昼食会場へ移動する。

「がんこ高瀬川二条苑」という所。ここは繁華街祇園の少し北、木屋町通りの一番北に位置し、高瀬川がここから顔を出す。

昼食を終え次の所、金戒高明寺へ。約十分程で移動するが、バスはその南の岡崎別院（親鸞聖人の若い時の居所）の前に着いた。その別院と東の岡崎神社の間の細い坂道を登らねば光明寺につけない。本堂御影堂右手に熊谷直実（源平合戦の後法然上人の仏門に入った武将＝連生房）の立派な松がある。堂内の左側に浄土真宗最初門と書かれた額がある。専修念仏と親鸞聖人が救われたと言われたそのものかと思いをめぐらしていた。

さらに中に足を運ぶと法然上人八百回忌を記念に造ったばかりの池泉回遊式庭園である。法然上人の生涯を石組にして作られている所がある。浄土系の寺には少し珍しい庭と拝観料だなあと思いつつ寺を後に、来た道を戻る。

バスは南進し蹴上の発電所を通って山科の八ツ橋製造元へつく。もうバスが五～六台も止っているから口の字形の売店は超々満員で試食がてらの買い物だからすぐ空となる箱の多さよ。

今回の御正当報恩講団参のご縁をいただいた事に感謝するばかり。

【行事予定】

一　月　一　日(祝)十時　修正会

十四日(土)七時半　同朋委員会・例会
（役員は七時）

十九日(木)二時　学習会

二十八日(土)十時　二十八日講・女人講

二　月十一日(土)七時半　同朋委員会・例会
（役員は七時）

十九日(日)二時　学習会

二十八日(火)十時　二十八日講・女人講

《二十組行事》

一　月十一日(土)四時　美よし・新年会